

現代神道と社会課題をめぐる近年の研究動向

— 福祉から社会貢献へ、まなざしの軌跡 —

板 井 正 斉

はじめに（目的と対象）

本稿の目的は、現代神道と社会課題をめぐる近年の「ある脈絡」における研究動向を整理し、その成果の確認と、残された課題を宗教学あるいは宗教社会学の立場から明らかにすることである。

「ある脈絡」とは何か。いささか謎かけのようだが、それは別の脈絡から比較することでわかりやすくなると思われる。そこで、現代神道との関わりについて、一般にどのような社会課題が取り上げられてきたのかを見てみよう。試みとして、ここ10年間でニュースになった神社あるいは神道の話題を、Google News Archive Searchで検索してみると⁽¹⁾、結果は「神社」が29,600件、「神道」が931件であった⁽²⁾。画面上に並ぶ記事タイトルを概観すると、「神社」の前後に一致するキーワードは、「靖国」「問題」「本庁」「規則」「訴訟」等。「神道」では「国家」「国体」「天皇」「参拝」「教育」等が目につく。あくまでも恣意的な解釈だが、google社の提供するアルゴリズムに基づいた推測として、現代神道と、ここに挙げたキーワードとの関係性が、一般にニュース性の高い社会課題といえそうである。

これまでの神道研究もそれに応えるように成果を積み上げてきた。例えば、安蘇谷正彦による『現代社会と神道 神道神学試論』（ぺりかん社、1996）は、平成7（1995）年に起こった地下鉄サリン事件を契機として時機を見た問題提起であった。安蘇谷は、「現代社会と神道」を次の3つの基本テーマから論述している。それは「現代の日本社会において神道はどのような意味をもつのか、あるいは神道はいかなる役割を果たしているのか」「現代社会における諸問題

について、神道の立場からどのように対応すべきか」「神道の立場から現代社会の諸問題に対応するための研究方法」である⁽³⁾。そしてその具体的な対象として、「脳死」「臓器移植」「ターミナル・ケア」「国家」「靖国問題」「家庭」「教育」等を幅広く捉えており、その問題意識の先見性には学ぶべき点が多くある。安蘇谷に代表される従来の神道研究では、「現代」を一貫して神道神学の立場から論じている点に特色がある。その意味で取り上げられている社会課題は、神社神道の原理原則に直結しやすい距離にあるものから優先的に論じられてきたといえるだろう。もちろん、神道学に基づく研究方法としては当然の結果であり、十分な成果を挙げていることに間違いはない。

ところが、最近になって、新たな研究課題の萌芽を見てとれる。その一つは、神社新報創刊六十周年記念として出版された『戦後の神社・神道 ― 歴史と課題一』（神社新報社、2010）である。同書は「戦後六十年の神社・神道の歩みを振り返り、その重要な諸事項についての課題・問題点を検証して現在および将来への展望を提起することを目的⁽⁴⁾」としたと凡例にある。目次を概観すると、おおよそ取り上げられている事項は、当然だが前述の神道神学に基づく原理原則に直結しやすい課題が大半を占めている。その中に、「神社の公共性・公益性について」「現代社会と神社」「現代社会と神社祭祀」「神道・神社と福祉」といった項目が含まれているのに気が付く。それぞれの内容からは、過疎化や都市化をめぐる地域社会の変化が、神社や宗教意識に変容を与え、新たな役割の創出が「福祉」や「社会貢献」という視点から求められ始めていることを読み取ることができる。しかしながら、これらの項目が同書の「第六章〈神社）」「第七章〈祭祀・信仰）」「第九章〈教学・教化）」に分散して取められていることから、新たな課題ではあるものの、既存の問題意識では見出しにくい視点であり、まだまとまりをもった研究枠組みが設定されているわけではないように思われる⁽⁵⁾。

さて本稿で捉えたい社会課題は、これまでの現代神道の社会課題とは脈絡を別にしながら登場したと思われる「福祉」や「社会貢献」である。前置きが長くなったが、冒頭の「ある脈絡」とは、従来の神道学による研究方法では、対象になりにくかった社会課題について、主に宗教学や宗教社会学の領域におい

て近年、蓄積されてきた研究を意味する⁽⁶⁾。

しかもその射程には、「地域」を対象としながら「ボランティア」「ソーシャルキャピタル」「観光」、さらには「つながり」「絆」「支え合い」に至るまで、前述のオーソドックスな研究方法が対象としてきたキーワードに比べると、神道神学とやや距離感があるか、あるいは抽象的なものばかりが含まれている。

さらに、現代と付した時間軸は、平成 10（1998）年以降を範囲とする。その根拠は、後述するが、一つに同年、皇學館大学神道研究所で「『神道』を“伝える”—今、なぜ、何を？—神道と現代社会—」と題されたシンポジウムが開催されており、それ以前の研究動向がまとめられつつ、新たな課題につながる議論の端緒が見出せるからである。もう一つに本稿が対象とするキーワードが社会課題として一般にクローズアップされてきた時期であることも挙げられる。

同シンポジウムを起点として、「ある脈絡」の以降の研究動向を振り返ると、短期間でありながら、いくつかの重要な論点の変遷が見られる。

そこで、本稿では、平成 10（1998）年以前と、先のシンポジウムを含めたその後の 4 つの学術上の議論を中心に、関連する研究成果を補完しつつ編年的に再考することで、その成果と課題を示す。なお、対象とする議論は次の通りである。

- ①平成 10（1998）年以前
- ②平成 10（1998）年度 皇學館大学神道研究所シンポジウム「『神道』を“伝える”—今、なぜ、何を？—神道と現代社会—」
- ③平成 12（2000）年度 皇學館大学神道研究所公開学術シンポジウム「“宗教・地域・福祉”を考える」
- ④平成 17（2005）年度 国際宗教学宗教史会議第 19 回世界大会（IAHR2005）「宗教と福祉—宗教の社会貢献と宗教間協力に向けて—」
- ⑤平成 20（2008）年度 日本宗教学会第 67 回学術大会パネル「現代日本における地域活動と宗教文化の活用—神道と福祉の接点—」

1, 平成 10(1998)年以前

前章で本稿の起点を平成 10 (1998) 年としたが、それ以前においても興味深い先行研究や関連事項は少なくない。次章で考察する平成 10 (1998) 年の皇學館大学神道研究所シンポジウム『『神道』を“伝える”—今、なぜ、何を?—神道と現代社会—』において、司会を務めた牟禮仁による配布資料「関連事項年譜⁽⁷⁾」がその里程標になる。年譜は〔神道研究, 神道学の世界: 関連〕と〔神社・神道界: 関連〕に別けて事項が列記されている。それぞれの端緒として、昭和 30 (1955) 年 4 月の國學院大學日本文化研究所開設, 昭和 47 (1972) 年 4 月の皇學館大学神道研究所開設 (以上〔神道研究, 神道学の世界: 関連]), 昭和 62 (1987) 年 5 月に神社本庁が新庁舎に移転し, 教化・情報センターをめざしたこと (〔神社・神道界: 関連]) が挙げられている。これは牟禮の想定する「現代」の範囲が、関連性の高い 3 つの機関の組織化からであることを伺える。

列記された事項を概観すると、現代社会に言及してきた神道研究者や機関・団体をおおよそ把握できる。研究者としては、菌田稔, 真弓常忠, 上田賢治, 櫻井勝之進, 平井直房, 安蘇谷正彦, 石井研士, 佐野和史, 櫻井治男等である。機関・団体としては、先の 3 機関の他にも国際宗教研究所, 神道青年全国会議, 神道文化会, 千年の森に集う会等が挙げられている。

その中でも石井研士の一連の成果に注目したい。『戦後の社会変動と神社神道⁽⁸⁾』(大明堂, 1998) と題した著書では、第 1 部に研究史として「戦後の神道研究をめぐる諸問題」「近代化と神社神道」がまとめられている。石井は、戦後の神道研究を宗教学の立場からできるだけ客観的に振り返ることで、研究動向とその内容について貴重な指摘をしている。まず研究動向としては、戦後の神道研究を次の 3 つの時期に区分した。

- ①昭和 37 (1962) 年 神道宗教学会シンポジウム「近代化と神道」の開催及び、昭和 38 (1963) 年 神道宗教学会シンポジウム「共同討議 神社神道の現状と将来」の開催。
- ②昭和 40 (1965) 年 アメリカ・クレアモントで開催された第 1 回神道研

究国際会議における討議テーマとして「近代化と神道」の設定。

- ③昭和 42 (1967) 年 東京で開催された第 2 回神道研究国際会議における討議テーマとして「近代 (工業) 化と神道」の設定。

石井は、この 3 つの議論が、「社会変動と神道をめぐるさまざまな問題が先鋭的・萌芽的に集約され」た時期と位置づけつつ、研究上の問題点として『『近代化』の概念規定』『個人と共同体』『実証性の欠落』を指摘している⁽⁹⁾。

さらに、議論の背景には研究者の「変化」の認識の違いがあり、それが現代における神道の在り方に対する評価にも影響を与えているとみる。つまり岸本英夫、平井直房、戸田義雄の理論を挙げ「近代化説の受容と日本への適応」として、欧米の理論を取り入れるだけでは「日本独自の社会変動と宗教的価値観もしくは宗教集団の在り方を考察することを排除する」として批判する。その象徴的な影響が、第 2 回神道研究国際会議の中で三笠宮殿下の「統一テーマが『持続と変化』であるが、『持続』の方が多く現れて、『変化』が軽視されたのではないか」というコメントに見ている。その上で石井は、戦後の神道研究における「実証性の欠落」を最も重要な問題点として次のようにまとめる。

個人的な日常経験の延長線上に変化や持続の指摘がなされたり、あるいは宗教的な信念を背景に行なわれる主張は、たとえ膨大な量の調査資料にまさる的確な分析の可能性がないわけではないとしても、学問的な客観性をともなって、研究者間に共有されることはない⁽¹⁰⁾

あくまでも実証的な調査に基づいて社会変動と神社神道との関係を捉えようとする石井の研究視点は、「ある脈絡」に通じる議論の端緒と、研究方法の視座を提供している。すなわち、現代社会という捉えどころのない対象に、神道や神社との相関性を見出す作業は、神道や神社から現代社会を見るだけでなく、現代社会から神道や神社を見ながら、両者の互恵的な関係性をできるだけ一般化することが求められると考えるからである。

2、平成10(1998)年度 皇學館大学神道研究所シンポジウム

『神道』を“伝える”—今、なぜ、何を?—神道と現代社会—

同シンポジウムは、平成10(1998)年11月21日に皇學館大学で開催された。発題者は、藺田稔、平野孝國、佐野和史の3名で、コメンテーターは、石井研士、本澤雅史の2名、司会は牟禮仁が務めた。

開催趣旨には、同研究所が設置され25年が経ち、「大学、その研究機関と社会との間に、学問・研究活動を媒介とした一層の交流が求められている」ことから「この機会に『神道』と社会・環境との関わりのあり方を、神道研究のあり方とも合わせ、あらためて考えたい」と企画意図を説明している⁽¹¹⁾。ここでは、研究機関と社会とのつながりと、神道と社会とのつながりを相対化することで、議論のきっかけを見出そうとしているように思われる。その上で、【主題：関心と論点】が、[関心]を2点、[論点]を7点にまとめている⁽¹²⁾。ここでは最も重要な[関心]を紹介する。

[関心]「神道」の今とこれからの考える上での前提として、改めて基礎となる問いを出してみましょう。

[1] 今、「神道」は求められているのでしょうか？求められているとしたならば、それは、誰から、誰に、何のために、何が、なのでしょう？一方、「神道」に関わる側では、今、「神道」を伝えることが求められているのでしょうか？求められているとしたならば、それは、誰が、誰に向けて、何のために、何を、なのでしょう？

[2] これらについての発言、研究、活動などは、個別の人や組織によってすでになされてきてはいますが、それらはのぞましい形で行われ、また有効に関わりあっているといえるのでしょうか？⁽¹³⁾

神道と現代社会との関わりを論じることが、必ずしも当時の神道学におけるメインストリームではなかった。平成10(1998)年以前の動向についても、石井が整理した昭和30年代後半から40年代初めにかけての国際的な議論以降、

決して盛んであったとは言い難い⁽¹⁴⁾。同シンポジウムを開催した神道研究所としても、従来なかったテーマであることからシンポジウムの進行に困難を伴ったと、清水潔所長（当時）も最後の挨拶の中で認めている⁽¹⁵⁾。実際に、あらかじめまとめられた「関心」と「論点」を出発点にしながらも、発題はこれらを参考にしつつ日頃考えていることを自由に述べる形で進められる。その結果、三者の発題は、ベクトルを三様にしながら広範な内容になってしまったことは否めない。

それでも、本稿における同シンポジウムの意義は、テーマ設定だけに留まるわけではない。それはまず発題者、コメンテーターともに共通して社会・家庭・地域社会の変動あるいは変容を前提にしている点にある。その上で、発題者らの属性を神職とそうでない立場にわけて読み直すと、議論の方向性を捉えやすくなる。

まず神職ではない立場から、社会変容を背景にして神社の発信する情報のレベルを表面的なものではなく、その本質を伝えることができるのか、という冷静な石井のコメントは、神職でもある藪田の「神社が基盤とした共同体は、すでにその本来の姿を完全に喪失した」という認識をあらためて引き出している⁽¹⁶⁾。その上で藪田は、都市化や近代化の議論を越えたレベルで、「家郷喪失者」に対する自説にもとづいた神道的な共同体意識の涵養の必要性を答えている。さらに、神職でもある本澤は、藪田が以前紹介したマイケル・パイの「adjusted primal religion」としての神道の特質から前述の前提を「事実を事実として押さえた上で、神道は何ができるのかということを探る必要」があるとコメントしている⁽¹⁷⁾。また、同じく神職でもある佐野の「神社に聖なるものが一極集中することが一つのチャンスになるかも知れない」という示唆から、人生儀礼や交通安全祈願等を挙げながら、儀礼の現代的意義を「考え方、信仰というものが変わった局面において現われた現象」としての連続性を重視することを世俗化と別けて指摘する⁽¹⁸⁾。

必ずしも明確な結論に至ったシンポジウムではなかったが、なによりも積極的なテーマ設定がまず意義深い。加えて、発題者の属性を踏まえて読み直すと、社会課題を共有しつつも、議論の実証性や客観性に関する非神職の立場からの

指摘に対して、神職の立場からもあらためてその必要性を認める言説が示されたといえる。また、現代社会に「求められている」と「伝えること」の区別や、「伝えること」の教化や布教との差異や強さへの着目は、これより後の議論にもつながっていく重要な点であった。

3、平成12(2000)年度 平成12年度皇學館大学神道研究所 公開学術シンポジウム「“宗教・地域・福祉”を考える」

同シンポジウムは、平成13(2001)年3月3日に皇學館大学名張学舎で開催された。パネリストは、室田一樹(岩屋保育園園長・岩屋神社宮司)、辻村泰範(宝山寺福祉事業団理事長)、岡本千秋(ミード社会館館長)の3名で、コメンテーターは、桑原洋子、宮城洋一郎の2名、司会は櫻井治男、本澤雅史が務めた。

開催趣旨については、冒頭司会の櫻井から次の3点が説明された。第1点は、平成10(1998)年に皇學館大学社会福祉学部が開設したことである⁽¹⁹⁾。第2点は、社会福祉学部開設に伴って神道研究所においても神道と福祉の基礎的な研究プロジェクトを立ち上げたことである。その焦点として、宗教と福祉に関わる歴史や思想、人物、施設活動、社会活動の諸宗教との比較を挙げている。そして第3点は、宗教研究の立場から福祉を見るだけでなく、福祉研究の立場から宗教を捉える視座の拡大である。その際の対象として、従来、宗教と福祉の接点として論じられてきた個人や組織を超えて、地域という空間を加えている。その上で、各パネリストには次の5つの話題が示された。「宗教と福祉の接点」「宗教者と地域社会との関わり」「宗教施設の地域社会における役割」「宗教の社会的活動の具体的様相」「地域福祉への展望」である。これらの開催趣旨や話題は、いずれも櫻井の一連の論考において提示された神道と福祉に関する研究枠組みに基づいている⁽²⁰⁾。

シンポジウムにおける議論は、宗教者であり福祉実践者でもあるパネリストから極めて現実的な発題がなされた。「活動の基本となっております理念は、各宗教のカテゴリーによって異なっているとはいえ、実践された地域福祉活動、そのスピリチュアリティには共通するものがある⁽²¹⁾」という桑原のコメントに基づいて、その相違と、共通点についてまとめながら、シンポジウムの意義

を考察したい。

まず、神道福祉、仏教福祉、キリスト教福祉といったそれぞれのカテゴリーによる違いとしては、やはり仏教福祉とキリスト教福祉の理念の明確さと、現代社会課題への実践の蓄積・先駆性が挙げられる。それに対して神道福祉にはまさに今後の理論構築が求められるのであるが、室田からいくつかの独自性の強い視点が示された。一つは、神社が地域共同体のシンボルとしての役割を担えなくなりつつある中で、地域を再考する必要性を踏まえた時、具体的に自身の関わる NPO 活動を例に挙げながら、地域を超えた情報化によって、特定のテーマに人が集まることの意味を指摘している。この点は、先の平成 10 年(1998) 度シンポジウムからもつながる問題意識だろう。そしてそのテーマの一つに「環境」を挙げ、鎮守の森を「観念の森」と位置付け、「考え方の森というものを活動の場」にして保育園や NPO や神社、そして地域の人々が活動を展開していくことを提案している。この提案に対しては、牟禮仁より詳細な意図の説明を求められ、室田は「鎮守の森の現実的価値のみに注目するのではなく、その価値がもたらす価値観(意味)に共感し人が集うこと⁽²²⁾」と答えている。

もう一つ室田は、神道と保育、神社と保育園を考える時、「神道を子どもたちに保育するというのが神道保育、神社保育じゃなくって、なんかもっと子どもたちの育ちに根幹的に関わるようなことをやるべきだし、やれるはずだ⁽²³⁾」という。その具体化として暗渠のある園庭や、コーナー保育の実例を紹介している。この発言に対しては、自らもキリスト教福祉の立場から大野光彦が「宗教という問題を中心に据えて福祉を考えますと、自己矛盾になる。社会福祉ってところに視点を据えて宗教を考えるっていうことになりますと、そんなに矛盾じゃない」と考え方の方向性についてフロアからコメントを寄せている。

その一方で、三者の福祉実践において共通していたのは、ある意味における宗教色の薄さである。この点について宮城は、次のような質問をパネリストに投げかけている。

宗教色というものを、どのような意味で福祉事業の中で展開すべきなのか。桑原先生がおっしゃったように福祉主体者のスピリットとして内包さ

れた形で実践されているというのが、現実の状況ではないかと思えます。それぞれの場での宗教行事などにより、宗教色を出されていますが、それで完結し得るのか。宗教色を出すということは一体どういうことなのか。あるいは今後、今のような形を提示するようなことが望ましいのか⁽²⁴⁾。

室田は、一見神道と関係のないように見える配慮に、神道との関係性を持って保育をしているというように、教化的な意味を全面に押し出すのではなく、考え方そのものに宗教色の強い子ども観を持っていると説明している。

辻村は、クリスマスを例に挙げて「[「なんでお前の所でクリスマスやってんねん」とこうよく言われました。うまく説明できませんでしたが⁽²⁵⁾」と、施設行事における宗教色は薄いという。それでも保護者等に対しては、多様な価値を認めつつ、「私達が今やろうとしていることは、ある種の価値の体系を作り上げていくことや。価値の体系を作り上げていくというとき、そこには譲れないものがあ⁽²⁶⁾」るとする。その葛藤は、「私自身にも、あるいは関係者にとっても宿題でもあり課題」としつつ、法的な解釈（公金支出の制限）の限界を指摘している。

岡本は、「あんまり難しく考えてないんです。私共が福祉をやって行っているのは、自分たちの信仰の証⁽²⁷⁾」として実践していると主張している。

加えて三者に共通していたのが社会福祉法人と宗教法人との法的な住み分けの中で、社会福祉法人の定款への宗教的な表現については、回避あるいは削除がなされている。

同シンポジウムの意義は、一つにこれまで神社神道に属する立場からの議論になりがちだった社会課題に対して、福祉というテーマで一気にその議論の範囲を拡大させたことが挙げられる。それは櫻井によって示された神道と福祉研究の枠組みをベースに実践レベルでの比較が有効であることが示されたといえる。その後の議論へ向けて神道福祉、仏教福祉、キリスト教福祉のそれぞれの独自性や共通点が多岐に渡って示された意味は大きい。もう一つに、宗教と福祉の考え方として、神道と福祉が他の先駆的な理論構築の後を追うだけでなく、地域という独自の対象を持ち得ることや、福祉から宗教を捉えるという方

法論的視座の提供がなされた。さらに宗教と福祉を考える上で司法上の課題や、それに対する支援者であり宗教者自身の葛藤、そして実践での宗教色の出し方には、カテゴリーを超えた共通性が確認できた。

4、平成 17(2005)年度 国際宗教学宗教史会議第 19 回世界大会 (IAHR2005)「宗教と福祉—宗教の社会貢献と宗教間協力に向けて—」

前章、平成 12(2000)年度の「「宗教・地域・福祉」を考える」シンポジウム以降、まったく別の脈絡から近接した研究テーマが登場する。宗教の「社会貢献」あるいは「社会参加」に関する研究である。学術上の議論の端緒は、平成 14(2002)年の日本宗教学会第 61 回学術大会において「宗教の社会参加」のテーマセッションが持たれている⁽²⁸⁾。より議論の枠組みが整えられたのは、平成 16(2004)年の「宗教と社会」学会第 12 回学術大会においてテーマセッション「宗教の社会的貢献—その条件と社会環境をめぐる比較宗教・社会論的考察—」が開かれている⁽²⁹⁾。これらの議論の中心には、櫻井義秀のタイの開発僧の事例研究や、稲場圭信の利他主義に関する研究があり、時期を同じくして、現代社会における宗教の新たな役割の創出を宗教社会学の領域から捉えようとする多様で萌芽的な研究を包含していく。その一つとして、神道と福祉研究も接近することになり、平成 16(2004)年には、櫻井治男、井守哲郎、稲場圭信、藤本頼生に筆者も参加して、神道文化会の座談会として「福祉文化と神道文化」が開かれた⁽³⁰⁾。

以上のような経緯を前置きにしながら、平成 17(2005)年に国際宗教学宗教史会議第 19 回世界大会 (IAHR2005)において、「宗教と福祉—宗教の社会貢献と宗教間協力に向けて—」と題したパネル発表がなされることとなる⁽³¹⁾。

パネルは、「現代社会において人々が“よりよく生きる”とは、どのような意味として理解することが可能なのであろうか」とする問題提起に対して、10名の研究者がキリスト教、仏教、イスラーム、神道、新宗教、民族宗教の視点から発題がなされた。当日はフロアに 40 名ほどが参加し、活発な議論となった。あらかじめ示された議論のポイントの内、①社会福祉・社会貢献活動における宗教の(宗教ならではの)出番はそもそもどこにあるのか、②福祉文化(人間

存在における well-being) と通底する宗教文化は、それぞれの宗教でどのように表現されているのか、③宗教間協力の可能性、に沿って、内容をまとめてみたい。

まず、①については、稲場圭信が「宗教の社会貢献と利他主義—日本の宗教団体の社会奉仕活動—⁽³²⁾」と題して主に欧米における宗教の社会奉仕活動の展開を振り返りながら、現代宗教の NGO 活動の現況と展開可能性を述べている。それに対して、ランジャンナ・ムコパディヤーヤと櫻井治男の二人が、日本の仏教と神道を概観している。それぞれランジャンナ・ムコパディヤーヤは「日本仏教と社会福祉—近代化とグローバル化における展開—⁽³³⁾」と題して、日本の明治期における仏教社会福祉の確立と現代における国際的な展開状況を考察している。また、櫻井治男は「福祉社会における民族宗教としての神道の実践的役割について⁽³⁴⁾」と題して神社神道が地域社会に果たしてきたさまざまな役割と、その福祉文化における位置づけを整理している。

次に、②としての具体的な事例研究については、アメリカの病院における臨床牧会活動の現状と日本への適応可能性を論じた古澤有峰「病院チャプレンと臨床パストラル教育運動⁽³⁵⁾」や、大阪釜ヶ崎での日雇い労働者に対するキリスト教の支援活動を紹介したヘアマンセン「私の兄弟である最も小さい者⁽³⁶⁾」、イスラームのボランティア活動の位置づけを考察した細谷幸子「イランの介護福祉施設におけるボランティア活動とイスラーム⁽³⁷⁾」が発題された。国内外のキリスト教やイスラーム教の事例に対して、神道については、ハンセン病施設での神社創建、廃絶、再興の歴史、及びその社会奉仕活動の事例を紹介、考察した藤本頼生「ハンセン病施設における神社の創建、廃絶、再興⁽³⁸⁾」と、伊勢神宮におけるバリアフリーの問題に取り組む NPO の活動から見える宗教と福祉の関係を考察した筆者「日本における宗教文化と福祉文化の接点—社会福祉のサブカルチャー—⁽³⁹⁾」が発題された。いずれも個別の宗教教団やその周縁における歴史的实践的な事例が多彩に紹介されている。

最後に③については、日中戦争時における中国仏教徒の動向を考察した野世英水「仏教の社会貢献⁽⁴⁰⁾」と、新日本宗教団体連合会（新宗連）の歴史と現在の活動の紹介を通じて、宗教の連合体の役割と課題について考察した金子昭「新

宗連における宗教間協力と社会貢献活動⁽⁴¹⁾」が発題された。

本パネルの本稿における意義は、よりグローバルな視点から事例の比較がなされた点にある。それは以下のパネル趣旨からも伺える。

宗教・宗教文化と同じように、社会福祉の領域は、その内部に多様な概念を含んでいる。ある人は国家制度としての社会保障の意味として、またある人は個人やグループによるソーシャル・ワークの対象や技術の問題、さらにはコミュニティにおける相互扶助の姿としてとらえるであろう。また、福祉国家や福祉社会という概念では必ずしも捉えきれない社会や地域もあろう。しかしながら、このパネルでは、各発表者が、人間社会における well-being に宗教・宗教文化はどのように関わっているのかという問題関心のもと、宗教の社会に対する役割と諸宗教間の協力のあり方を問う機会としたい。各発表者は、諸宗教の社会貢献の実像を個人や社会におけるレベルや歴史的レベル、さらには諸宗教が存在する文化的・社会的背景、あるいは宗教思想などの観点から提示する予定である⁽⁴²⁾

前述した通り、発題は趣旨に沿った内容であり、フロアからの積極的な質疑応答に加えて、本パネルをまとめた『宗教と福祉』（皇學館大学出版部、2006）の序文には島藺進が「グローバル化の時代の新しい宗教研究の可能性を予感させる試み」と評していること等から、パネルの一定程度の評価は認められる。その後、平成 18（2006）年には、櫻井義秀と稲場圭信らを中心として、「宗教の社会貢献活動研究会」が「宗教と社会」学会のプロジェクトとして立ち上がり、筆者も含めた多様なテーマの研究者が積極的継続的に議論を深めていくこととなる。

しかしながら、本パネルがこれ以降の議論に与えた課題も指摘しておきたい。それは、福祉あるいは社会福祉と社会貢献、社会参加というキーワードがひとくくり論じられるようになったことである。このことについては後述する。

5、平成20(2008)年度 日本宗教学会第67回学術大会パネル

「現代日本における地域活動と宗教文化の活用 — 神道と福祉の接点 —」

前章までは主に他宗教との比較を中心としたグローバルな研究展開だったのに対して、それらの成果を踏まえつつ、神道の独自性を掘り下げていくいわゆるグローバルな視点からの研究も進展していく。その一つとして平成20(2008)年度の日本宗教学会第67回学術大会パネルにおける「現代日本における地域活動と宗教文化の活用 — 神道と福祉の接点 —」での議論がある。本パネルの趣旨は、まちづくりといった地域活動に対して、神社や神道を宗教文化資源として活用することの意義を問うという試みであった。当日は櫻井治男が司会を務め、コメンテーターには研究者ではなく実践者である中尾伊早子(NPO ちんじゅの森代表幹事(当時))を招いて行なわれている。発題は、神社の宗教文化資源としての要素を「場」「祭礼」「観光」という3つの切り口から論じることで構成されている。

まず、藤本頼生「地域の子育て支援と神社の資源 — プレイセンター・ピカソの事例 —」では、東京都国分寺市にあって、神職が常駐しない神社が、保護者の自主的な子育てサークルの場として活用されている事例が考察された。次に、黒崎浩行「地域づくりへの参加機会創出と神社祭礼 — 人吉市の事例から —」では、宗教文化資源としての祭礼を様々な社会集団による参加機会の創出という局面から熊本県人吉市の青井阿蘇神社例大祭「おくんち祭」を取り上げた。次に、森悟朗「観光の地域づくりと宗教文化資源 — 神奈川県江の島の事例から —」では、宗教文化資源としての神社が、観光という脈絡の中で、いかに宗教性を維持してきたのかを、神奈川県江の島の事例から考察された。最後に筆者「聖地へのアクセシビリティ — 宗教観光地としての神社を事例に —」では、歴史的に聖地として発展してきた宗教観光地への現代的なアクセシビリティに関する社会課題について、ボランティアの視点から「宗教文化の価値」を再考することを目的に、伊勢神宮における参拝ボランティアの事例を取り上げた。

発題に対する中尾のコメントは、次の通りであった。

現在の学校では教えられない生活文化の視点で神社、神道をみていくことが必要との観点から、場としての神社の役割、神社のあり様について自身の考えを述べた上で、研究者の視点だけでは客観的すぎて人々に神社神道と福祉文化との接点がうまく伝わらないのではないか⁽⁴³⁾

また、場と祭礼、観光という切り口に対しては、「農業をしない現代人にとっては、祭礼が「ハレ」の空間、エンターテインメントとしては非常に弱い印象でしかない」とも付言している。さらに、筆者の発題に対しては、「かつて車椅子のなかった社会状況と現代の社会状況とでは大きく前提が全く異なるなかで、いかにNPOが中間支援組織として場としての神社のあり様と人々の心の持ち方とのバランスをとってあげられるのかが課題」と指摘している⁽⁴⁴⁾。

さて、本パネルの本稿における意義は、3つあると考える。まず一つは、前述したように、これまで他宗教との比較といったグローバルな研究視点の拡大を踏まえつつ、現代神道の社会課題に再び特化して議論の掘り下げがなされた。そこでは、やはり地域活動を現代神道独自の対象と置きながら、そこに潜在するであろう宗教文化資源としての神社や神道がいかに有効活用されるのか、というある意味で汎用性の高い問題意識が共有された。また二つ目には、いずれの発題も実践や実践者との相互関係を重視したフィールドワークが研究方法として用いられている。何より本パネルのコメンテーターを中尾に務めてもらったことが象徴的であるし、かつまた中尾のコメントが我々に示唆する点は大きかったと考える。最後に、一つ目の意義として挙げた問題意識の共有の背景には、注目すべき他領域における議論との接近があった。最も影響があったのは社会保障分野における広井良典らを中心とした持続可能社会の実現を目指す上でのケアやコミュニティの再考に関する議論である。広井はケアの対象を「個人—コミュニティ—自然—スピリチュアリティ」という次元に統合させて捉えようとする。それを可能にさせる具体的な社会資源として日本の神社や寺に注目をする（鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク（WESネット：Welfare, Environment (Ecology) and Spirituality Network）⁽⁴⁵⁾。ともすると、他宗教の独自性先進性から、福祉や社会貢献の主体である個人や団体の活動にのみ焦点

を当ててしまいがちな議論に、客体とのつながりの背景（コミュニティ）を見逃さない視点が提示されたことは、神道との関わりを論じる上で、極めて重要な示唆を含んでいる。

おわりに（成果と課題）

現代神道と社会課題をめぐる近年の研究動向を、従来の神道学による研究方法では対象になりにくかった社会課題、すなわち「福祉」や「社会貢献」について、主に宗教学や宗教社会学の領域における近年の研究を振り返ってみた。対象とした平成10（1998）年以降は、日本社会における社会課題がそれまで以上に複雑化し、多様化している。それと同時に、オウム事件以降、宗教全般への新たな社会的役割が様々な理由で要求され始めた時期でもあり、個別の実践を宗教学や宗教社会学が学問上の解釈と社会への応答を試みようとする模索し始めた時期ともいえる。そのことは現代神道めぐっても例外ではなかった。実践と学問とを包含する教育現場である大学においても、平成10（1998）年には皇學館大学に社会福祉学部が開設され、平成14（2002）年には國學院大學神道文化学部が開設された。これらの背景には、神道を根幹に置く両大学の現代社会に対する新たな役割創出への期待を伺うことができる。

さて、研究動向に焦点を絞ると、前述の背景を踏まえながら、2つの脈絡が接近し、融合していったプロセスを明らかにできたと思う。すなわち「神道と福祉」と「神道と社会貢献・社会参加」である。平成10（1998）年度のシンポジウムでは、現代神道から社会課題を考えていくことの重要性は共有されつつも、まだその具体的な対象を設定するには至らなかった。平成12（2000）年度のシンポジウムでは、その対象に「福祉」を置きながら、他宗教との比較や、地域とのつながりから課題解決へ向けた役割を捉えようとする枠組みが提起された。そこにまた別の脈絡から「社会貢献」や「社会参加」に関する宗教社会学の研究が登場し、両者の新たな社会への役割創出という共通目的が親和性を高め、接近・融合したことで平成17（2005）年度のパネルへと帰着した。融合されたテーマは、その後、宗教の社会貢献活動研究会において積極的に議論されることとなり、その成果は『社会貢献する宗教』（世界思想社、2009）⁽⁴⁶⁾ とし

て出版もされた。「宗教は自分勝手であってはならない!!」というセンセーショナルな帯書きに象徴されるように、その後、現在に至るまで、議論はより多様な意見を踏まえながら活発化している。

同時に、現代神道の独自性を掘り下げ、かつ研究と実践レベルとの応答性を求める取り組みも平成 20 (2008) 年度のパネルから伺うことができ、新たに広井良典を始めとする他領域での研究成果とも連携が模索されている⁽⁴⁷⁾。

以上の研究動向の成果をまとめるならば、福祉から社会貢献へと問題意識のまなざしを広げながら、複雑化する社会課題への現代神道の役割を他宗教との比較を含めつつグローバル化できた、といえるだろう。そもそも従来の神道学においては捉えにくかった課題へのアプローチであることを考えれば、ここまでの流れは必然だったのかもしれない。

その一方で、残された課題も大きい。それは福祉と社会貢献があいまいに論じられてきたことに集約される。両者が親和性を高く持ちながら、融合されていったとはいえ、研究を深化させる中で、いつまでも「福祉≒社会貢献」という課題設定には無理がある。研究成果を、より実践応用レベルに近づければ近づけるほど、福祉と社会貢献との整理・峻別は現実的な作業だと考える。何より、拡散し続ける社会課題に対して現代神道の役割を抽象論に留めず、より実証的に捉えるための有効なパースペクティブを提示することこそが、現代神道研究に携わる者としての役割なのであろう。この点については、今後検討を試みたい。

【注】

- (1) Google News Archive Search は、2006 年 9 月に google 社が公開したニュースリーダー。過去 200 年分のニュースについて検索が可能となっており、日本語版サービスはないが、検索対象言語に日本語は含まれている (<http://internet.watch.impress.co.jp/cda/news/2006/09/07/13217.html> (2010 年 6 月 23 日閲覧))。
- (2) 検索条件は、「神社」「神道」共に次の通り。Find results: with all of the words “神社” “神道”, Date: Return results published between 2000 and

2010, Language Return results written in Japanese, Price: Return articles with the following price "all prices", View: Search articles (2010年6月23日検索).

- (3) 安蘇谷正彦『現代社会と神道』ペリかん社, 1996, 1-3頁.
- (4) 神社本庁総合研究所監修, 神社新報創刊六十周年記念出版委員会編『戦後の神社・神道—歴史と課題—』神社新報社, 2010, iv頁.
- (5) それでも平成20(2008)年に新設された神社本庁総合研究所の研究課題(本庁教学の基礎的研究)には, 「現代社会における神社をめぐる諸問題に関する研究について」が挙げられている. 具体的には, ①神社と地域・家庭・個人に関する研究, ②地域共同体と社会奉仕活動に関する研究, ③情報化社会と神社信仰に関する研究, ④その他の4つの研究で構成されており, 先ほどの項目を網羅する視点の確立が期待される(神社本庁総合研究部2010「総合研究所特集」『月刊若木』732附録, 13-15頁).
- (6) なお, 神道と福祉あるいは神道と社会貢献・社会参加に関する研究としては, 藤本頼生『神道と社会事業の近代史』(弘文堂, 2010)が, 現時点で最もまとまった内容になっている. 同書は, 近代における神社行政と社会事業との関わりを踏まえて, 現代につながる両者の関係性を体系的に論じている. 本稿では, 藤本を補完する視点から, 本研究の成果と課題をまとめる.
- (7) 「「神道」を“伝える”—今, なぜ, 何を?—神道と現代社会—」『皇學館大學神道研究所紀要』16, 皇學館大學神道研究所, 2000, 104-107頁.
- (8) 石井研士『戦後の社会変動と神社神道』大明堂, 1998.
- (9) 石井注8同書, 29頁.
- (10) 石井注8同書, 49頁.
- (11) 神道研究所注7同書, 102頁.
- (12) 「[論点]〈A〉「神道」を“伝える”にあたり, 考えなくてはならないこととして, 次の点が問われるでしょう. [1] 求められる“伝える”こととは, どのような行為なのか? [2] “伝える”ことが, なぜ, 何のために求められるのか. 必要とされる理由・目的は何か? [3] 何を“伝える”のか, 伝えようとする内容・メッセージは何か? (「神社」を伝えることとの差異は?)

[4] 主体者は？関係・対象者は？両者の関連のあり方はどうなのか？ [5] 現況はどうなのか？これから、どのように伝えていくのか？〈B〉関連して、次の問いが加えられるでしょう。[6] “伝える”に際しては、一方的ではないコミュニケーションが求められます。それは、「神道」としてはどのようなあり方か？また、教化・伝法・伝道／宣教・布教等との差異はどこにあるのか？ [7] “伝える”内容・メッセージの妥当、適切さの根拠は何に、またその強さはどこにあるのか？」（神道研究所注7同書，103頁）。

(13) 神道研究所注7同書，102-103頁。

(14) 石井は、同シンポジウムで「なかなか神道と現代社会という、現代をテーマにしたシンポジウムや話しあいの機会が少ないので、参加させていただいてありがたかったと思っています」と発言している（神道研究所注7同書，100頁）。

(15) 神道研究所注7同書，102頁。神道研究所シンポジウムは、「年1回開催。神道に関わる、研究史上における専門的、基本的主題（神道研究所の研究主題と関連するものを主に）について、研究の現状（問題点・課題）を整理し、新しい展望を開くことに主眼をおく（『皇學館大学神道研究所紀要』20，皇學館大学神道研究所，2004，6頁。）」とある。平成7年度から、平成21年度まで16回開催されている。タイトルのみを列記すると次の通り。第1回「伊勢神道の成立とその意義」、第2回「祝詞を考える」、第3回「日本古代の即位儀礼をめぐる諸問題— 践祚・即位・大嘗祭—」、第4回「近代日本の政教関係の枠組みをめぐる一特に「国家神道」を中心として—」、第5回「「神道」を“伝える”— 今、なぜ、なにを？—」、第6回「日本古代の文化交流をめぐる諸問題」、第7回「“宗教・地域・福祉”を考える」、第8回「近代欧米諸国に於ける政教関係」、第9回「鈴屋門における宣長学の受容と展開」第10回「國學・皇學・神道」、第11回「神祇信仰と新古今時代」、第12回「熊野の自然と文化」、第13回「伊勢神宮史研究の現状と課題」、第14回「鈴鹿家資料と小原家文庫」、第15回「宇治・山田と神仏分離」、第16回「神社奉納和歌研究の現在」。タイトルからのみ見ても、第5回、第7回が挑戦的なシンポジウムであったことを推測できる。

- (16) 神道研究所注7同書, 89頁.
- (17) 神道研究所注7同書, 86頁.
- (18) 神道研究所注7同書, 95頁.
- (19) その使命を「人と人, そして人と自然との共生を理念としました神道の福祉のあり方を基本としまして, 専門的な知識を持った学生さんを社会へおくりたい」とあらためて示している(「“宗教・地域・福祉”を考える」『皇學館大学神道研究所紀要』18, 2002, 25-87頁).
- (20) 櫻井治男「神道と福祉」『皇學館大学神道研究所紀要』13, 1997, 219-232頁. 及び櫻井治男「神社神道と社会福祉」国際宗教研究所編『現代宗教』2002, 東京堂出版, 2002, 251-264頁等.
- (21) 神道研究所注19同書, 51頁.
- (22) 神道研究所注19同書, 69頁.
- (23) 神道研究所注19同書, 34頁.
- (24) 神道研究所注19同書, 56-57頁.
- (25) 神道研究所注19同書, 41頁.
- (26) 神道研究所注19同書, 59頁.
- (27) 神道研究所注19同書, 59頁.
- (28) 「宗教の社会参加」のセッションは, 稲場圭信の司会によって, 以下の発題がなされた. 稲場圭信「利他主義及びケア精神の発達と宗教」, ランジャー・ムコパディヤーヤ「日本における『社会参加仏教』—法音寺と立正佼成会の事例から—」, 藤本頼生「戦後における神社界の社会奉仕活動—ハンセン病施設の神社再興—」, 板井正斉「神事芸能と知的障害者援護施設」, 泉経武「地域開発をめぐる宗教秩序の形成—タイ東北地方の開発僧研究—」. 詳細は『宗教研究』335, 日本宗教学会, 2003, 119-125頁.
- (29) 「宗教の社会的貢献」のセッションは, 櫻井義秀が代表者となり, 以下の発題で構成された. 櫻井義秀「問題提起として—Socially Engaged Religionとしてのタイの開発僧の事例から—」, 稲場圭信「宗教団体の社会奉仕活動と社会制度—欧米の事例をもとに—」, 金子昭「台湾における宗教社会事業の展開—とくに仏教慈濟基金会の『四大志業八大脚印』について—」,

- ロバート・キサラ「テロ時代の平和活動 — 日本新宗教はどう対応しているか —」, 櫻井治男 討論者. 詳細は『宗教と社会』11, 2005, 163-183 頁.
- (30) 座談会の詳細は『神道文化』16, 2004, 11-54 頁.
- (31) IAHR2005 東京大会のテーマは「宗教 — 相克と平和」であった. 関連する他パネルとしては稲場圭信がコンビーナーを務めた「Social Engagement of Religion in Modern Society」があり, 次の発題がなされている. Allahyari, Rebecca A.: Homeschooling Politics: Schooling Alone for the Social Good? /Gill, Robin: Altruism and Religious Belonging in the United Kingdom /Kemp, Daren John: New Age: Escapism or Activist New Socio-Religious Movement? /Yeung, Anne Birgitta: Social Engagement and Religion in Scandinavian Perspective.
- (32) 稲場圭信「宗教の社会貢献と利他主義 — 日本の宗教団体の社会奉仕活動 —」 櫻井治男他『宗教と福祉』 皇學館大学出版部, 2006, 1-19 頁.
- (33) ランジャンナ・ムコパディヤーヤ「日本仏教と社会福祉 — 近代化とグローバル化における展開 —」注 32 同書, 69-94 頁.
- (34) 櫻井治男「福祉社会における民族宗教としての神道の実践的役割について」注 32 同書, 95-104 頁.
- (35) 古澤有峰「病院チャプレンと臨床パストラル教育運動」注 32 同書, 2006, 21-47 頁.
- (36) クリスチャン・ヘアマンセン「私の兄弟である最も小さい者」注 32 同書, 49-67 頁.
- (37) 細谷幸子「イランの介護福祉施設におけるボランティア活動とイスラーム」注 32 同書, 121-151 頁.
- (38) 藤本頼生「ハンセン病施設における神社の創建, 廃絶, 再興」注 32 同書, 191-231 頁.
- (39) 板井正斉「日本における宗教文化と福祉文化の接点 — 社会福祉のサブカルチャー —」注 32 同書, 153-170 頁.
- (40) 野世英水「仏教の社会貢献」注 32 同書, 171-190 頁.
- (41) 金子昭「新宗連における宗教間協力と社会貢献活動」注 32 同書, 105-119 頁.

- (42) 注 32 同書, 243-244 頁.
- (43) 藤本頼生「パネル主旨のまとめ」『宗教研究』82-4, 日本宗教学会, 2003, 161 頁.
- (44) 藤本注 43 同書, 161 頁.
- (45) 広井良典・石井秀樹「鎮守の森・お寺・福祉環境ネットワーク」『月刊福祉』87-13, 全国社会福祉協議会, 2004, 51 頁. 及び, 広井良典「老人・子ども・コミュニティー『人間の三世代モデル』の視点から」幼老統合ケア研究会編『幼老統合ケア』黎明書房, 2006, 17 頁.
- (46) 稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』世界思想社, 2009. 同書では藤本頼生が「神社神道と社会貢献の関わりを考える」を執筆している(同書, 83-105 頁).
- (47) 藤本注 6 同書等.